

石田 剛彦



尾形 曜平

基礎製図法

第4課題 小空間の設計

1年2組

担当=
石田 道孝
宇杉 和夫
小石川 正男
小松 清路
白江 龍三

石田 剛彦

私は、 $4 \times 6 \times 9$ の空間に様々な長方形を重ね合わせて配置することで空間を構成した。私のコンセプトの主題は「空間と移動」で、人が生活の中で動くこ

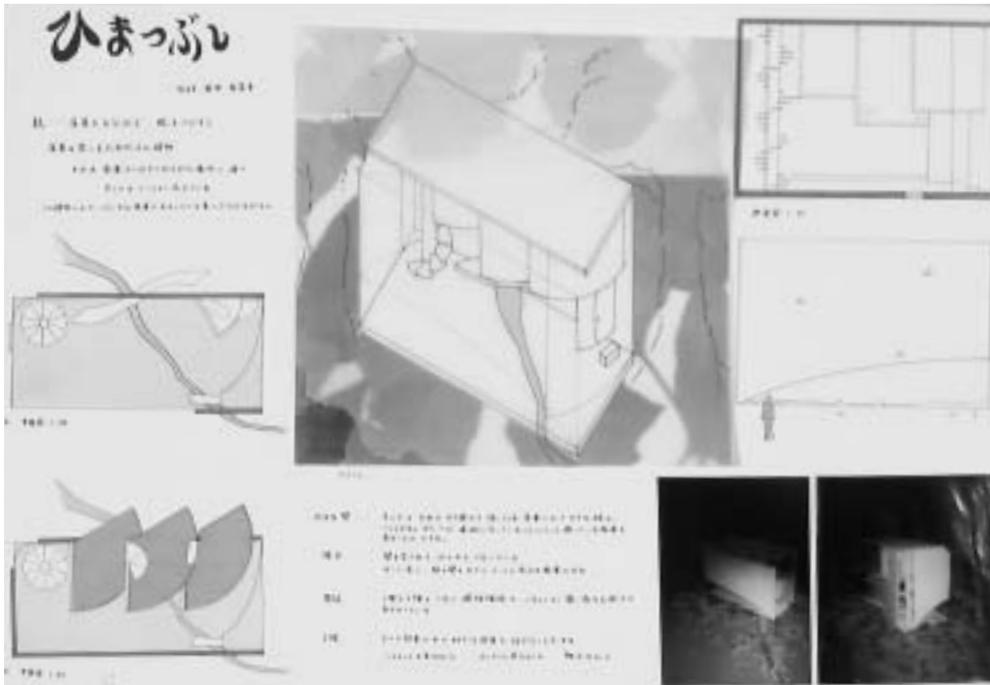
とによって空間の形態が刻々と変化して行く様を、楽しむことができるように計画した。様々な高低差を持つ床面と玄関から三階まで見渡せる開放空間を一体化させ、内部だけでなく外部からも空間の変化を楽しめるように考えた。

指導=石田 道孝

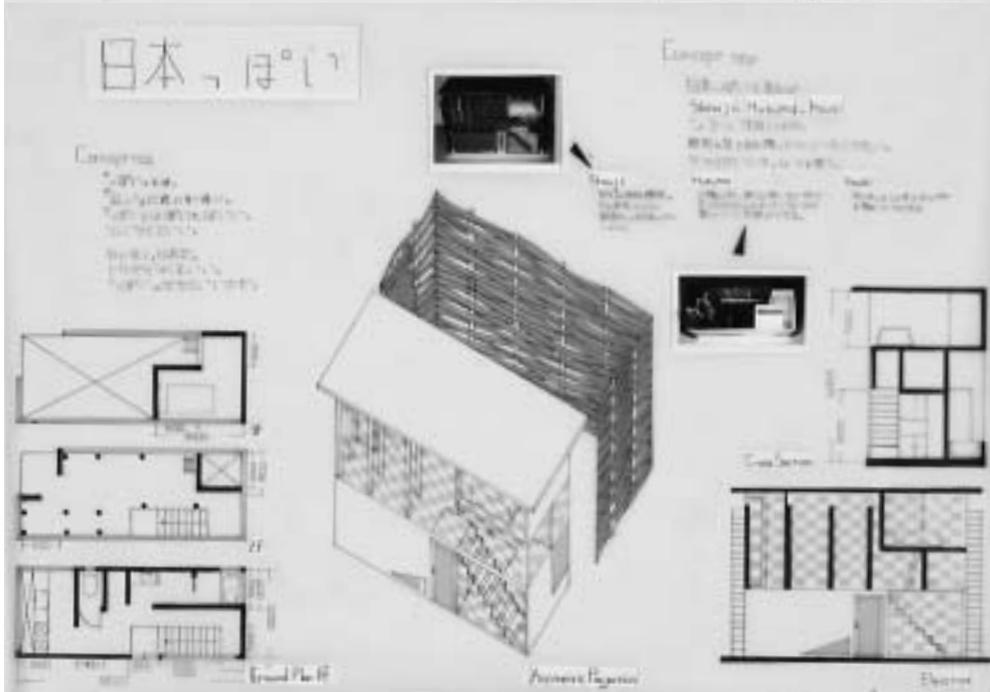
石田君の作品は、人の動きと空間との出会いを基軸にして、XYZの3直行軸に接する矩形空間を組み立てるといふきわめてオーソドックスな手法を用いてデザインしている。しかしながら、構成された空間は $4 \times 6 \times 9$ のきわめて限定された空間の中であるにもかかわらず、

内部としての空間の広がりや凝縮された空間、様々な矩形空間の繋がりを形態美として表現するなど、盛りだくさんで楽しい空間表現がなされている。動的で変化のある空間がオーソドックスな3軸によって構成され、落ち着いた嫌みのないデザインとなって好感が持てます。また、内部空間の変化を外部に伝えることにも開放空間と閉鎖空間を上手に構成して、成功している。内部の生活空間機能との融合が今後の課題となりますが、このような空間構成の試みを大切にして欲しいものです。

尾形 曜平



田中 布美子



平田 真貴

私は、自己の名前をデザインの一様式にまで冠した偉大な芸術家、ピエト・モンドリアン氏に感銘を受け、今回の創作に取り組みました。氏の代表作であるコンポジションを床面、壁面、天井面の六面に組成することによって、空間というよりもむしろ大きな六枚の立面絵画で構成するモンドリアンそのものを鑑賞する楽しみを表現してみたかった。

指導=石田 道孝

尾形君はモンドリアンの幾何学的な平面格子と基本色をデザインモチーフとして、4×6×9の矩形空間のデザインを試みた。尾形君はモンドリアン格子

を3次元化することはせず、4×6×9の外部にモンドリアンを描いた4面の壁画面を配し、この図柄を無彩色の壁と床の格子状断面を基本構成とし、空間を組成している。この空間をモンドリアンの基本色と格子で構成された外壁面と対峙させ、家具デザインも統一を図り空間的広がりや一体感を持たせている。デザインモチーフの選択からコンセプト決定まで1年次の学生のレベルを超える思考力と表現努力に賛意を送りたい。モンドリアンの思考に忠実に、あくまで2次元にこだわり続けた中での一つの解決方法であろう。今後、さらに多くの巨匠たちのデザインを学び、大きく成

長することを期待しています。

田中 布美子

この空間はまさしく落葉を楽しむむためだけのものである。自然の落葉が人工的に創った空間を通して、どのように見え、感じることができるのかを考え、この作品をつくった。この空間に一步踏み入ると、あらゆる角度からさまざまな姿の落葉を見ることができる。

指導=宇杉 和夫

これは空間構成の手法による作品ではなく、田中さん自身の、まわりを日常的にみている感性がこれを構成させているように

思える。「ひまつぶし」がテーマである。「落ち葉 (いちよう) を見る」ことがそれである。狭められた壁の間の、白い壁を背後に落ちる黄色いひとひら一片のいちようの葉を、彼女は眺めている。その土に積もった落ち葉は、その白い壁の下の部分をカーブして穿った長い下窓から眺めている。制約された空間ではあるが、歪められたものとも、洗練されたものとも感じずに、自然に素朴にみえるところがこの作品の真価である、これは1つの現代の囲い草庵である。一階の半外部空間はその待合・茶席である。ここで Lullaby of the Leaves でも聞きながらダーズリンでも囁り

たい。時間に自ら縛られて、空白をなくして安心を得ている多くの日常生活を反省すると、この「ひまつぶし」が如何に本当の目的に近いものかが知らされる。学生の作品という枠を除いてもこの空間を逸品と考える。あとは落ち葉の下にもたくさんの生命があることを感じたい。

平田 真貴

この作品のテーマの「日本っほい」という言葉は、先生方には不評でした。しかし、私の現段階でのレベルからいってもこの表現が一番合っていると思います。〈Japanesque〉としてもよかったです。そんな固いものではなくもっと気楽というか、軽い感じの作品なので、敬えてませんでした。このことを理解していただけると、とてもうれしいです。

指導=小松 清路

銅板でつくられた竹細工のような塀が、なんとと言ってもこの作品の特徴である。細工の編目からの光は、昼と夜とを反転させる効果があり、建物の外皮として興味深いものになっている。平面計画において、1階に水廻り(台所、便所、洗面所、浴室)をまとめ2階はワンルームとして多目的に使える空間としている。一部ロフト的な寝室(3階)を2階の中に取り込んでいる。外部に対して比較的開放的であるガラス面は、透明と磨りガラスの市松模様になっている。市松模様は、桂離宮松琴亭の一間、二間の襖紙や、現代数寄屋に多く用いられ、ジャポネスクのモダン化に寄与したデザインパターンである。そんな模様を、透ける外壁全面に使うことによって、建物の皮膚とならしめている。2階に自立する柱は、日本民家の田の字型平面の柱であり、襖にかわって布を張り、フレキシブルな空間構成を使い分けたい、と本人は言う。空間として決して広くない2階部分ではあるが、意図として十分理解できるものである。本人がやりたかったことは、日本のいくつかの材料やディテールを建築言語として語ることにあったように思われる。禁欲的で、スマートな作品ではないが、タイトル同様、味のある作品になっている。